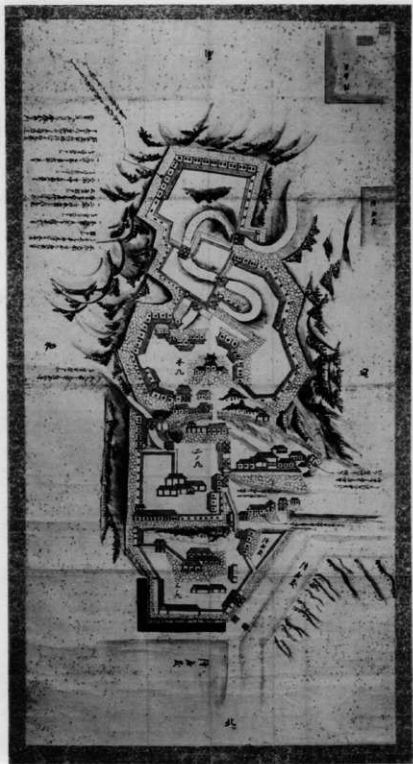




巻頭図版1 高山城絵図(寛文3年)



卷頭図版 2 高山城絵図 (延宝 4 年)

序

天正13年(1585)、豊臣秀吉の命を受けた金森長近は三木自綱を滅し、飛騨の国を統治した。長近は、高山城の築城と城下町形成に力を注ぎ、16年間の歳月をかけて完成させた。金森氏は6代107年間続いたが、元禄5年(1692)山形県上山^{上山}へ転封になり、後、城は取り壊されてしまった。

現在、城跡は都市公園として広く利用されているが、近時、市民を中心に高山城の遺構確認と、学術的な調査を求める声が上がリ、岐阜県教育委員会の指導を得てこの発掘調査を実施したのである。

調査にあたっては、名古屋工業大学内藤昌博士、奈良国立文化財研究所高瀬要一氏のご指導と金森公顕影会のご協力をいただいた。

今回の調査は本丸の一部であるが、風呂屋跡の発見、貴重な遺物の出土など大きな成果を上げており、高山城の歴史解明に役立つものと期待される。報告書刊行にあたり、調査に従事、ご協力をいただいた皆様に感謝申し上げる次第である。

昭和61年3月

高山市長 平田吉郎

本文目次

例言

第1章 城山の自然環境

はじめに	1
第1節 高山盆地	2
第2節 江名子断層	3
第3節 城山丘陵の地形と地質	5
第4節 濃飛流紋岩	5
第5節 丹生川火砕流堆積物など	7
第6節 城山本丸跡	9

第2章 発掘の経過

第1節 現況	10
第2節 発掘の経過・調査日誌	12

第3章 高山城の歴史

第1節 金森氏入国までの沿革	13
第2節 金森氏の入国と高山城築城	15
第3節 高山城の規模と城下町	18
第4節 高山城主金森六代	22
第5節 高山城の石垣修築	25
第6節 金沢藩の在藩と廃城	27
第7節 城跡の変遷	30

第4章 遺構

第1節 本丸遺構全体の遺存状態	34
第2節 発掘された礎石	37
第3節 付帯調査・二之丸唐門の石垣	40

第5章 遺物

第1節 金属製品	41
第2節 陶磁器	42
まとめ	45

挿図目次

挿図 1. 松本盆地 高山盆地の接峯図面 (第四紀 No.19 1973より) …… 1	
2. 高山盆地の地形概図…………… 2	
3. 地形図の海拔700Mの等高線図 …… 3	
4-1. 地形断面図 (城山を通る稜線の 投影図) ……………… 4	
4-2. 地質断面図…………… 4	
5-1. 城山の東-西断面図…………… 5	
5-2. 城山の南-北断面図…………… 5	
6. 地質構造図…………… 5	
7. 地質概念図 (高山図幅による) …… 8	
8. 高山城跡、野鳥生息地の文化財指 定区域図……………11	
9. 天神山城絵図 (飛州誌所載) ……13	
10. 高山城曲輪・建物配置図……………18	
11. 高山城下町配置図 (金森時代末期 の道路及び武家地、町人地、寺社) ……………20	
12. 高山城石垣破損箇所位置図……………25	
13. 飛騨国高山城図 (本丸) ……………35	
14. 本丸全体平面図……………36	
15. 発掘された礎石実測図……………38	
16. 発掘された礎石断面図……………39	
17. 二之丸館西側の唐門位置図……………40	
18. 二之丸館西側唐門付近の断面図……………40	
19. 出土遺物分布図……………41	
20. 出土遺物 (1~3土師質陶器 4天 目茶碗 5すり鉢 6~12鉄釘 13~15古銭) ………………43	
21. 昭和29年太鼓櫓の石垣から発見さ れた釘 (木片が付着している) ……44	
表 1 城山公園一帯敷地所有者調…10	
2 鉄釘長さ別出土点数……………41	
3 出土陶磁器類……………42	
系図 1 金森家系図……………23	

図版目次

巻頭図版 1 高山城絵図 (寛文3年)	
2 高山城絵図 (延宝4年)	
図版 1 城山と分水嶺…………… 4	
2 本丸付近の板状節理…………… 6	
3 錦山溶結凝灰岩(地質・図幅高山)より …………… 6	
4 丹生川火砕流(地質・図幅高山)より… 6	
5 城山付近の航空写真……………12	
6 高山城下町絵図……………21	
7 高山城在番第2番藤田平兵衛以下 帰路の行列図 (金沢市立図書館蔵) ……………28	
8 高山在番記……………29	
9 高山在番御普請方御入用帳……………29	
10 飛騨国高山廃城一卷……………29	
11 高山城下割地絵図 (高山市郷土館 蔵) ………………30	
12 発掘された礎石 (空地南側礎石群) ……………34	
13 唐門付近の古絵図……………40	
14 北山公園からの城山全景……………46	
15 本丸 (上段) の現況……………46	
16 本丸 (下段) の太鼓櫓下の石垣…47	
17 本丸十間櫓下の石垣と水の手…47	
18 大手三ノ門付近……………48	
19 本丸 (上段) 南端に露出している 石垣……………48	
20 太鼓櫓の礎石……………48	
21 搦手ノ門の礎石……………48	
22 十三間櫓の礎石……………48	
23 搦手一之木戸の下方の石垣……………48	
24 発掘された遺構全景 (北から) ……49	
25 発掘された遺構全景 (東から) ……49	
26 空地北側の礎石群……………50	
27 空地西側の礎石群……………50	
28 二之丸唐門の石垣……………50	
29 本丸の現況測量……………50	
30 発掘作業状況……………50	
31 太鼓櫓の石垣から発見された鉄釘 ……………50	
32 出土遺物 (陶磁器類) ………………51	
33 * (金属製品) ………………51	

例 言

1. 本書は、昭和60年10月3日から11月8日まで発掘調査を実施した、岐阜県高山市城山地内の高山城跡発掘調査報告書である。今回の調査区域は本丸上段部分の内、200㎡のみである。
2. 本遺跡発掘調査は、岐阜県補助金（岐阜県文化財保護費補助金・昭和60年9月20日付教文第443号）の交付を受けて実施した。
3. 調査は下記の調査団によって実施した。

団 長 高山市長 平田吉郎 副 団 長 高山市教育長 谷脇豊藏 指 導 岐阜県教育委員会 文化課 名古屋工業大学教授 内藤 昌 奈良国立文化財研究所 主任研究員 高瀬要一 調査担当事務局 高山市教育委員会 事務局長 田近 進 社会教育課長 山本 桂 高山市郷土館長 丸山 茂 文化財係長 小林 浩 郷土館職員 中田洋子	調査担当職員 日本考古学協会員 高山考古学研究会会長 石原哲弥 高山市教育委員会 社会教育課 田中 彰 高山市郷土館学芸員 谷島博之 調査員 岩花秀明 住 寿美子 谷島喜代三 西倉淳子 松本照美 本田孝子 吉田博子 川田雅子 調査協力者 中嶋知之 山腰哲也 森瀬千鶴子
--	--

4. また、広く市民と学識者の協力を得て、発掘調査を含む総合的な学術調査をするため調査委員会を設置し、次の各位を委嘱した。

名古屋工業大学教授 内藤昌、奈良国立文化財研究所 高瀬要一、高山市教育委員長 北村繁、高山市文化財審議会会長 大野政雄、金森公顕彰会会長 日下部尚、高山考古学研究会会長 石原哲弥、高山市議会総務委員長 稲垣敏男、高山市建設部長 岡崎幸夫

5. 本編の執筆は第1章を石原哲弥、第3章を谷島博之、第2、4、5章を田中彰が担当した。
6. 地形測量は丸山茂が行い、本編の挿図作製は各章の執筆担当者が受け持った。図版の写真撮影は田中彰が行った。
7. 調査にあたり、岐阜県教育委員会文化課小川敏雄氏、土川修平氏のご指導を得た。
8. 調査にあたって、高山市文化財審議会委員長倉三朗氏に助言、協力を賜わった。
9. 発掘調査にご理解とご協力をいただいた東海財務局東海財務事務所に深く感謝の意を表する。
10. 方位は磁北とした。

第1章 城山の自然環境

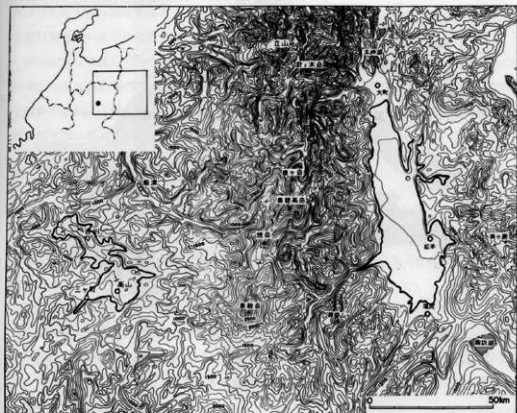
はじめに

市民に親しまれてきた城山公園の魅力は、長い歴史的な関わりと共に、自然環境の素晴らしさであろう。公園からの眺望の良さは勿論、高山市街地を前景とする小高い城山の構えは、その東方にそびえる北アルプスの連峰を背景として高山市の景観を一段と引き立てている。

また、城山は天然林を含めた豊かな森林と、そこに休憩する鳥類等の生物環境が保全されていることも特筆すべきことである。城山の恵まれた自然環境を後世に残す努力は、私達市民の責務でもある。

古城跡を中心とする城山公園が公園として設置されてから、既に百余年の歴史を有しているが、公園区域の南端は、金竜ヶ丘から日枝神社裏の山王公園へ続くやせ尾根である。自然鳥獣保護区域は、さらに南の山王峠の道路までが指定されている。

この章では、豊かな生物界の基盤となっている城山の地形と地質について、主として地質調査所発行の図幅「高山地域の地質」によりまとめてみたい。



挿図1 松本盆地、高山盆地の接峰図面(第四紀No.19 1973より引用)

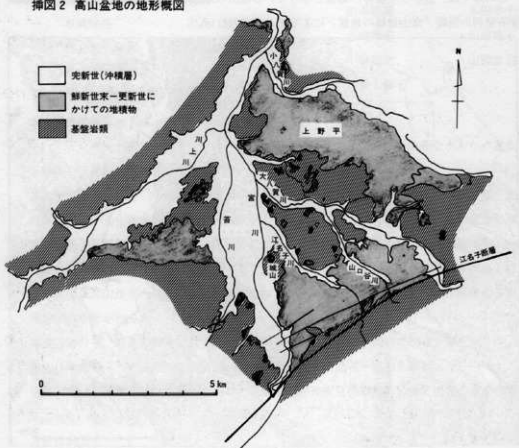
第1節 高山盆地

高山盆地は北アルプスの傾動、上昇運動による傾動地塊の緩傾斜面に位置している。反対側の傾斜面には、糸魚川—静岡線に沿う松本盆地が発達している。挿図1は松本盆地団体研究グループによって作られた接峯面図(註1)である。現在の谷を埋めた場合に出来る地形を示したものであるが、大まかな地形の特徴を読みとることができる。

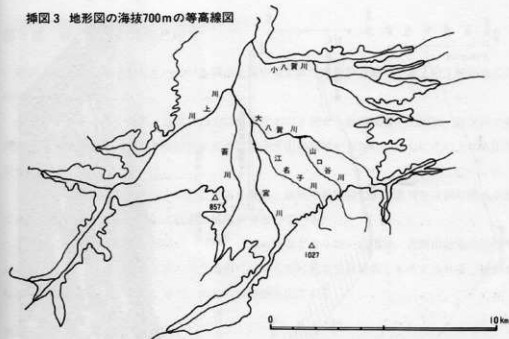
松本盆地に較べて盆地の規模は小さく、形は複雑で、北東から南西走向と、それに直交する北西から南東走向の地形が支配的である。

高山盆地は挿図2のように一般的に、宮川、川上川、大八賀川沿いに発達する完新世(厚さ4~10mの沖積層)の平坦地(海拔560~600m)を指しているが、盆地西部の西山丘陵、東部の城山、江名子、山口、北山の各丘陵地も含めた海拔750m以下の地形と定義できよう。さらに拡大すれば、盆地北東部にひろがる広大な上野平の台地も含めると、挿図3のように古高山盆地ともいえる盆地構造が考えられるのである。

挿図2 高山盆地の地形概図



挿図3 地形図の海拔700mの等高線図



言い換えれば、盆地の北側は見量山から東へ延びる山陵と千光寺山から西へ続く山陵が、西側は清見村方面へ高度を高める山地、東側は高度を上げつつ北アルプスへと続く山地、そして南側は東方向へ延びる位山山脈によって囲まれた盆地である。

位山山脈は海拔1,000～1,200mの山陵で、表日本と裏日本の分水界となっている。盆地の平坦面から高度差約300mの直線状の急崖が続いている。これは、第四紀更新世初頭以後の江名子断層の活動によって、徐々に形成された傾動、隆起地塊であり、高山盆地は江名子断層の活動で相対的に沈下し形成された構造性の盆地である。(註2)

第2節 江名子断層

挿図2に示されているように、江名子断層は高山盆地の南東縁に走る断層である。高山市滝町付近から清見村大原へ続き、総延長が45kmに達する中部地方でB級の活断層である。

最近の調査研究で、右横ずれ変位(最大変位量500m)と約300mに及ぶ垂直変位が確認された。(註3)

断層北麓から北へ片野・江名子・山口地区には、幅2kmに及ぶ鮮新世末の松原礫層、大洞層、丹生川火砕流堆積物などが分布しているが、位山分水嶺の頂上付近にも同じ堆積物が分布しており、江名子断層の活動は更新世に入ってからと推定されている。活発な断層活動を繰り返して、位山分水嶺を隆起させ、北麓に多量の角礫を供給して更新世の地層である江名子礫層、山口礫層を形成したと考えられる。

第3節 城山丘陵の地形と地質

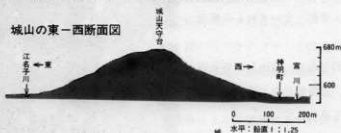
挿図4は江名子断層から北へ延びる城山丘陵の地形及び地質断面図である。山王峠が地質的な境いとなっている。

山王峠より南部の丘陵は、基盤岩の上に鮮新世末の下部より松原礫層、大洞層、丹生川火砕流堆積物で構成され、その上部に更新世の江名子・山口礫層が重なり、さらにその上に火山灰層が覆っている。

山王峠より北部の城山公園を中心とする丘陵は、盆地の基盤岩である濃飛流紋岩で構成されている。一部小範囲に丹生川火砕流堆積物が分布している。

地形的にみると城山(約687m)や錦山(753m)などの小高い山頂は、古高山盆地の浸食残丘地形、或は、江名子断層北麓の沈下地帯に対する相対的な昇地帯とも考えられる。挿図5は城山天守閣跡を中心にした東西、南北の地形断面図である。

挿図5-1 城山の東-西断面図



挿図5-2 城山の南-北断面図



第4節 濃飛流紋岩

城山を構成する岩体は、濃飛流紋岩類のうちステージⅡに区分される「錦山溶結凝灰岩層」である。錦山一帯を模式地とし、北は高山市松本町から南は石浦町まで、南北約8kmの範囲に分布する岩体に命名されている。

かつては「石英斑岩」と呼ばれていた岩体であるが、戦後、地質調査所によって地質調査が進められた。溶岩或は侵入岩でなく流紋岩質の

挿図6 地質構造図



溶結凝灰岩が主体であることが明らかとなり、「濃飛流紋岩類」と命名された。(註4) 分布は挿図6のように美濃・飛騨・木曾にまたがっており、中世代白亜紀末(約6500万年前)の幾回もの火砕流の噴出により、層序は大きくI～Vステージに区分されている。

「錦山溶結凝灰岩」は濃飛流紋岩類の第Ⅱステージに区分される。宮川左岸の山地から松倉山、源氏岳、位山、船山などに広く分布する「船山溶結凝灰岩」の下部と推定され、最大層厚は約200mである。基盤岩の飛騨外縁帯荒城川層(古生代石炭紀)、美濃帯の中・古生層(古生代二畳紀～中生代ジュラ紀)をいずれも不整合に覆っている。

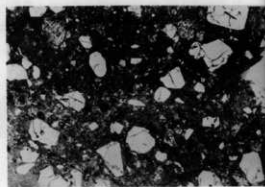
本層は盆地の基盤岩であり、宮川、江名子川の川床に露出したり、丘陵地形など低い山地に分布するため、著しく風化している。

城山公園の照蓮寺裏庭の崖や、神明町正雲寺坂の崖、鳥川原町側の崖などには、比較的新鮮な面が見られるが、旧ドライブウエー沿いの石碑(石叫ばん)後背の崖は、風化による縞模様が見られる。また、月見平付近の道路沿いには、厚さ2cm程度の板状節理が見られる。

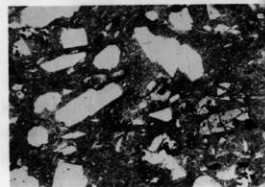
粗粒斑晶状の石英結晶(径5mm前後)に富み、直径数cm～10数cmの本質レンズが見られ、鏡下では基質の溶結構造が明瞭で、含有鉱物は石英>カリ長石≒斜長石>黒雲母・角閃石(まれに輝石)>不透明鉱物である。



図版2 本丸付近の板状節理



図版3 錦山溶結凝灰岩
(地質図幅 高山)より



図版4 丹生川火砕流
(地質図幅 高山)より

第5節 丹生川火砕流堆積物など

盆地周辺の丘陵地には、海拔約600m付近に厚さ約20mの濃飛流紋岩の円礫を主体とする松原礫層が分布している。城山丘陵では山王峠より南部の片野町の崖に露頭が続いている。

その上部に大洞層と呼ばれる灰白色のシルト-粘土層（1m-5m）、所によっては軽石質火山灰層がみられる。高山市大洞町高山自動車学校北側の崖の大洞層は、約300万年前と年代測定の結果が得られている。

その上部を丹生川火砕流堆積物が覆っているが、高山盆地東部に広く分布し、高山市新宮町がその西端である。盆地周辺の丘陵地に分布し、盆地内では厚さ30-50mである。東部ほど層厚は厚くなっている。

年代測定により約250万年前の噴出と推定されている。

兩輝石安山岩質溶結凝灰岩で、溶結した部分は節理が発達し、石材としても利用されている。昔から「ふご石」、「豆粉石」と呼んでいる比較的柔らかい岩石である。

城山公園では水道山からこぶし平、臥牛ヶ岡の旧ドライブウェイの崖にかけて小範囲分布している。海拔620m-650mにかけて直接に濃飛流紋岩（錦山溶結凝灰岩）を不整合に覆っている。これは片野地区の分布高度とほぼ同じである。

なお、城山公園の西側の山麓には崖錐堆積物による緩傾斜地形が形成され、やや平坦な地形には江名子礫層に対比される淘汰の悪いチャート・砂岩・頁岩などの角礫を主体とする礫層が分布している。

城山公園の南側の春日平付近には、江名子礫層の上部にあたる山口礫層が分布している。とくに砂岩礫が多く、赤色風化をしているのが特徴である。

山口町ではこの礫層の下部に上宝火砕流堆積物（岩井町の石切場の岩石）があり、65万年-90万年前の年代測定結果が出されている。また、上部には高山軽石層がのり、35万年前という年代が測定されており、山口礫層の堆積年代はこの間にあり、更新世中期の地層である。挿図7は以上のべてきた地質の概念図である。

第6節 城山本丸跡

風化した岩盤の錦山溶結凝灰岩層の山頂を平坦にならして、天守閣跡の礎石が据えてある。そのため、基礎ならしのための「石場かち、へとかち」作業は必要ではなかったと思われる。自然地形を巧に利用した城の構築であったことが伺われる。

付近に露出している石垣に用いている石材も、大部分は濃飛流紋岩で一部に丹生川火砕流堆積物がみられる。礎石の周囲や側溝遺構に用いられている玉石類は、濃飛流紋岩の円礫、中・古生層のチャートの亜角礫などである。

また、山王峠より南には約2～3mの火山灰層の堆積が見られるが、城山公園内では流出し堆積がみられない。

濃飛流紋岩の風化土壌や、風化の進んだ岩盤は、比較的水はけがよいので黄褐色の「かま土」として利用されていた。

天守閣跡の北面、金竜ヶ丘付近、二之丸跡の山麓や、島川原に面した部分は、風化土壌の流出による表層浸食も見られ、今後の保全が必要である。

註1 第四紀 No19 1973

註2 高山地域の地質 山田直利他 地質調査所 1985

註3 高山市南方の江名子断層 鹿野勲次 岐阜県高校地学教育 1979

註4 火砕流堆積物としての濃飛流紋岩 山田直利、河田清雄、渡橋毅 地球科学25の2,3 1971

文献 高山市付近の第四系について、梶田澄雄、石原智彌 地質学論集 第14号 1977

高山市城山公園の植生とその管理 矢本和夫、神出豊 高山市都市計画課 1977

高山盆地周辺の濃飛流紋岩類 福地寛夫 濃飛研連絡誌 1972

第2章 発掘の経過

第1節 現況 (挿図 8)

高山城跡は大正8年内務省の史跡指定を受けて以来、法の変遷により昭和31年9月7日岐阜県の史跡として指定され、その面積は11.4haに及ぶ。また、高山城跡を中心とした城山公園一帯は、「高山城跡及びその周辺の野鳥生息地」として昭和31年6月14日、高山市の天然記念物に指定され、鳥獣保護区特別保護地区でもある。一部は都市計画上の急傾斜地防災地区に指定される。海拔は、本丸頂部で686.1m(註1)あり、高山市役所(馬場町2丁目)580m、旧高山町役場(神明町4丁目)575mと比べ約100m高所にある。

元禄8年(1695)城郭取壊し後は、町民の憩いの場として活用され、現在も春の花見、秋の紅葉を楽しむため、城山に足を運ぶ人が多い。高山市民の生活領域の一部として、密接なふれあいをもっている。遊歩道を歩くと、スギの幹をリスが走り、80種に及ぶ野鳥が出迎えてくれる。自然植生の植物も豊富で、昭和56年にはササの新品種「ヒダノミヤマクマササ」が発見された。また、裏日本種と表日本種のササが混存する珍しい現象も確認されている。

このように、市街地に近接しているにもかかわらずたくさんの野鳥が生息し、自然植生が保たれ、史跡が保存されている例は稀であろう。

今回発掘調査を行ったのは、城山山頂部に位置する本丸跡であり、城跡の最高所である。現在は樹木にさえぎられて、四方とも展望はきかない。かつては360度の展望が開けていて、東は長野、北は富山、西は白川村、南は下呂、美濃へそれぞれ通ずる街道が見渡せる位置にある。

註1 高山市道路台帳1000分の1現況平面図(昭和59年8月31日高山市建設部土木課)によると本丸頂部は海拔686.1mであり、高山市役所2500分の1地図(Ⅳ-1 E52-1昭和46年撮影、側図、昭和58年変化修正)によると海拔687.6mとなり差異が見られる。

表1 城山公園一帯敷地所有者調査(昭和49年9月30日高山市教育委員会調査) 単位 m²

挿図8 \ 所有	国有地	市有地	民有地	小計
① 岐阜県指定史跡「高山城跡」	64,461	37,657	11,888.20	114,006.20
② 高山市指定天然記念物「周辺の野鳥生息地」	0	金龍ヶ岡以南 131,195	神明神社及び日枝神社他 116,474.14 民地の墓地 穴あき状態のもの 23.12	247,692.26
合計 ①+②=③	64,461	168,852	128,385.46	361,698.46

※面積は台帳面積による。高山市指定文化財野鳥生息地は①と②の区域である。

※城山公園としての面積は24.2haであり(昭和45年都市計画公園指定)、その区域は①と②の内国有地、市有地の全部、民有地の一部である。管理は高山市が行っている。

挿図8 高山城跡、野鳥の生息地文化財指定区域図



第2節 発掘の経過・調査日誌

近時、市民を中心に高山城の遺構を調査しその建物の跡を確認するとともに、高山城に関する歴史資料の解明を求める声が上がリ、岐阜県教育委員会の指導を得て発掘調査を実施したものである。現地調査は昭和60年10月3日から11月8日まで行った。以後歴史民俗資料館高山市郷土館において遺物整理と図面作製に取りかかり、61年3月に報告書を刊行した。

調査経過の概要を記する。

昭和60年

10月3～7日 資材搬入、基準のクイ打、現況写真撮影

8～9日 奈良国立文化財研究所高瀬要一氏による現地調査指導

10～11日 名古屋工業大学内藤昌博士による現地調査指導

12～15日 現況測量

16～24日 トレンチを設定し発掘開始。空地北側の雨落緑石、空地西側の風呂屋跡確認。

25～28日 空地東側、南側に礎石列を発見。

29～11月6日 遺構の平面測量、断面図作製。

11月7～8日 遺構面の埋め戻し作業

現地調査終了後報告書作製を開始、61年2月に校了し印刷準備に入る。



図版5 城山付近の航空写真

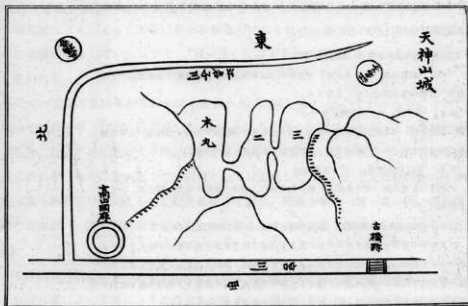
第3章 高山城の歴史

第1節 金森氏入国までの沿革

高山城はいつ頃から存在したかは定かではないが、金森長近が天正から慶長年間にかけて築城する以前は天神山城と呼ばれ、飛騨の守護である佐々木氏の一族高山氏(註1)が在城していたと伝わる。飛騨の守護の初見は元弘3年(1333)に岩松経家が補任されているが、この経家は建武2年(1335)の`中先代の乱`において戦死している。のち延文4年〔正平14年〕(1359)近江の守護佐々木道誉が飛騨の守護に補任された。佐々木氏は応永2年(1395)に隠岐・出雲両国の守護も兼ね、本国の近江を含め4カ国の守護となったが、のち六角家と京極家に分かれている。

当時飛騨は足利幕府から補任された守護佐々木氏に対し、南朝から国司が補任されており、建武年中(1334~1338)には姉小路家綱が任命された。国司姉小路氏は古城郡の古川を中心とした飛騨北部を治めたのに対し、守護側の勢力は主に飛騨南部を中心としていた。しかし応永18年(1411)に国司姉小路尹綱は足利義持の命を受けた京極高数らによって討たれ、のち姉小路氏は古河・小島・小鷹利の3家に分裂している。この時飛騨の最南端には三木氏が被官として置かれた(註2)が、この三木氏も高山氏と同様佐々木氏の一族と見られる。(註3)

京極家は嘉吉元年(1441)の`嘉吉の変`、後家督を継ぎ守護となった持清の時に六角家をし



挿図9 天神山城絵図(飛州誌所載)

のぐ勢いとなったが、この頃飛驒の守護代として多賀氏が派遣されている。天神山城は文安年中(1444-1449)に守護代多賀出雲守徳言によって築城され、近江の多賀天神を祀ったことから多賀天神山、城は多賀山城と呼ばれたという。(註4) 全盛を誇った京極家も「応仁の乱」の最中、文明2年(1470)に持清が没した後は相統争い、すなわち孫童子丸を擁する京極政高(のち政経)と多賀高忠、対して乙童子丸(のち高清)を擁する京極政光と多賀清直の二派に分かれ一族相争っている。その後文明17年(1485)には多賀清直の子宗直の名で飛驒の段銭が納められており、多賀氏の飛驒守護代は依然として存続していたことが窺われる。(註5) しかし多賀氏も京極家の内紛、六角家との争いの中で没落する中、飛驒においては争いに巻き込まれなかった京極家の被官が土着していった。高山氏もこういった中の一例と思われるが、永正年間には天神山城に高山外記が在城している。(註6)

戦国期の飛驒の情勢は、北飛驒の高原郷に江馬氏、吉城郡の古川郷に国司姉小路氏から分かれた小島・小鷹利の両家、また同郡広瀬郷に広瀬氏、大野郡の白川郷に内ヶ嶋氏があった。また今の高山附近には、天神山城に高山外記、中山に岡本豊前守、三枝郷に山田紀伊守、江名子に畑六郎左衛門、大八賀郷に鍋山豊後守等が割拠していた。これら飛驒の豪族は隣国の上杉・武田の勢力の影響に大きく左右されていたが、のち両氏が衰退するにつれて台頭してきたのは南飛驒益田郡の三木氏であった。三木自綱は永禄元年(1558)広瀬氏と結んで高山外記・山田紀伊守を滅ぼした(註7)が、以後天神山城は三木氏の属城となり三木久綱が在城した。(註8) また自綱は姻戚関係の岡本氏を討つなど、高山周辺を手中に収め、続いて天正10年(1582)には北飛驒最大の勢力であった江馬氏を滅ぼし、同11年には鍋山家へ養子入れしていた弟の頭綱を謀殺するなど着実に勢力をのばした。また三木氏は姉小路氏の国司の名跡を継ぎ、名実ともにほぼ飛驒を手中に収めるに至った。

(註1)『姓氏家系辞書』—高山氏の項—

「近江(安倍氏族、佐々木氏流)甲賀郡高山より起こる。浅羽本佐々木系図に「大原重綱—時綱—重信高山六郎」と見える。」

(註2)『飛州志』—三木氏略系より—

「藤原正頼 三木氏忠右衛門竹原郷ニ住ス応永年中飛驒国司延伐ノ時追手ノ大将京極近江守高員忠賞ニ依テ竹原郷ヲ領ス故ニ家臣正頼當国ニ米ヲ守之」

(註3)『姓氏家系辞書』—三木氏の項—

「近江(安倍氏族、佐々木氏流)佐々木系図に「泰清—義信—宗秀、號三木」と見える後裔。」

(註4)『明治39年神社取調書』(高山市郷土館蔵)—高山神明社の項—

「文安年中當国ノ守護タリシ京極大膳大夫持清ノ被官多賀出雲守徳言守護代トシテ當国ニ入り大野郡ニ在城ノ頃始テ天神山ニ城ヲ築キ所在ノ神祠へ我本国ノ氏神近江国犬上郡多賀神社ヲ配祀シ社殿改造シテ鎮守トシ神明ヲ多賀天神ト奉称シテ崇敬ヲ盡シ山名ヲ多賀天神山城名ヲ多賀山城ト称へ城下ニ府ヲ開キ是ヲ多賀山府ト称ス云々」

(註5) 『観元日記』 (所収: 『飛騨史考 (中世編)』) 一文明17年7月19日の項一

「多賀兵衛四郎方ヨリ飛騨國段線、〔御造作料云々〕且三千疋到来、」

(註6) 『飛州志』一高山城の項一

「瀧郷高山国府ニアリ旧称天神山城永正年中高山外記居之、」

(註7) 『飛州志』一三木氏略系の項一

「永禄元戊午歳広瀬三木両旗ヲ以テ天神山ノ城主高山外記用上郷三枝郡ノ領主山田紀伊守ヲ討トル天神山城ニハ伯父三木左門ヲ入レ置キ云々、」

(註8) 『飛州志』一高山城の項一

「永禄年中三木大和守自願持分氏族三木長門守久綱守之、」

第2節 金森氏の入国と高山城築城

天正13年(1585)7月豊臣秀吉は越中の佐々成政討伐の折、飛騨の三木氏を討つため越前大野城主であった金森長近に飛騨の攻略を命じた。金森軍は長近と養子可重の2隊に分かれて進攻し同年8月には三木氏の本城である松倉城を落として飛騨を征圧し、翌天正14年(1586)長近は飛騨一国を賜っている。飛騨の領主となった長近は一国を治める城地として最初は大八賀郷の鍋山城を考えたようであるが、のち瀧郷の天神山古城跡を選定した。ここは飛騨のほぼ中央に位置し、山がちな飛騨においてわりと開けた盆地があり、また各所への道が交差するなど一国の城地としてはよい立地条件を備えた場所であった。(註1)

築城については一般的に天正18(1590)から始まったという史書(註2)が重視され、『岐阜県史』『高山市史』、その他諸報告書類(註3)もこれに従っている。しかし高山の城下町建設は天正16年から始まっており(註4)、翌天正17年(1589)には白川郷の照蓮寺が城下に建立され、長近が竣工なった照蓮寺から城の普請を遠見したという記録がある。(註5)また高山城の支城である増島城は可重によって天正17年から築城が始められている(註6)が、本城の高山城はそれ以前に築城が始まっていたはずで、『飛州志』には天正16年開始とあり、この時開始されたものと思われる。

完成については天正16年から13年後の慶長5年(1600)(註7)と、それから更に3年で三之丸を築いて慶長8年(1603)に完成した(註8)という二通りの記述がある。これは高山城の配置を見ると二之丸下の桜門が大手門の役割をはたし、その門前を通ずる通りの左右に侍屋敷が建ち並んでおり、本丸二之丸までで一応城としては完成している。三之丸は城門前の侍屋敷が建ち並ぶ通りの脇につけ加えられた配置となっており、慶長5年の「関ヶ原の戦」、後飛騨を譲り受けた可重が、一国の収納米を収めるため引続き三之丸を造成し米蔵を配備したものと思われる。

よって高山城は長近によって天正16年から始まり、慶長5年までの13年で本丸、二之丸が完成し、以後可重によって更に3年で三之丸が築かれ、慶長8年までに16年かかって完成したと

するのが妥当である。(註9)

さて長近は高山城築城に際して地形を大きく変えたという記録が残っている(註10)、(註11)。城地の南方は山続きであるため途中を大きく掘切り、また北方は山を削り、平均して二之丸の用地にあて、その土で空町の北方に照蓮寺の用地を造成するなど、城下の整地を行なっている。

当時高山城の城代は遠藤宗兵衛であった(註12)が、慶長5年の「関ヶ原の戦い」の時も在城しており(註13)、この時点ではまだ城は築城中であることから、宗兵衛が築城の総奉行も兼ねていたものと思われる。このことはのちに水無神社拝殿の造営を任されていることから窺われる。また城の普請の人足は飛騨国中から集められ(註14)、一方城の作事にあつた大工は地元のほか各地から集められていた。(註15)

(註1)『飛州志』—高山城の項—

「元来天神山ハ大凡国府ノ中央也(中略)西方二国府ノ市肆列リ宮川其前ニアリ北ハ平陸ニ統キテ東ハ後地深泥也南ニ堀切アリ西方ノ山峰遠ク見切ッテ対スルモノナシ地堅尤相応ノ勝地ト可謂歟」

『飛騨国中案内』

「城郭の傍へ、凡日本国中に五つとも無之見事成る能き城地のよし承之候」

(註2)『飛騨国中案内』

「天正十八年より比城普請始、十三年にて漸二之丸迄出来ず、夫より三之丸まで始終十六年にて成就す。」

(註3)『岐阜県史跡名勝天然記念物4』昭和10年、岐阜県。『岐阜県指定文化財報告書3巻』昭和34年、県教委。『岐阜県文化財目録第2集』昭和46年、県教委。『岐阜県の文化財図録』昭和54年、県教委。『濃飛の文化財14号』昭和56年、県文化財保護協会。

(註4)『安川記』(所収：『大野郡史上巻』)

「同(天正)十六年より諸士の知行割、城地及家中の邸宅、並に町家の地図検分あり」

(註5)『蝦江記』(所収：『高山別院史上巻』)

天正十七年、五明の敷地を改易し城の地どりに相むかひ、(中略)御堂・庫裡程なく成就せしかば、大守照蓮寺に入来しおはしまして、御城の普請を遠見し給ひけり。」

(註6)『斐太後風土記』

「天正十七乙丑年、増島に新城を築きて移られる時、古川の町家をも盡く増島野へ引移されて、増島町と唱へし云々」

(註7)『飛州志』—高山城の項—

「天正十六年戊子より慶長五庚子二至ッテ管作悉ク全備ス」

(註8)『飛騨軍乱治国記』(所収：『神岡町史特集編』)

「天正十四年に金森法印長近は、古川の始ヶ城に移り、間二年有て、高山に新城の普請始、二之丸迄に十三年にて出来ず。其後三之丸迄に以上十六年にて城成就す。」

(註9)(註2)にあげた『飛騨国中案内』の記述が2年ずれているとすれば、年代は他の文献と一致する。(註8)の『飛騨軍乱治国記』と(註2)は同じ作者であり、いずれかが誤記してあることは明白である。

(註10)『飛州志』—高山城の項—

「本丸ノ山上ヨリ尾崎長ク片野ノ山王山に統キタリシヲ法印其中間ヲ掘切リタルニヨリ一山独立スルガ如シ」

(註11)『願生寺由来記』(所収：『高山別院史資料編』)

「今の城山は北の尾崎を国中の足寄り集まり、遙か引下しひきとる跡は二ノ丸、三ノ丸の敷地となり、引れる所は寺敷となる。その間は広々たる平地に均して大馬場にして左右は今の御侍屋敷、それより西低りては上有地や大野の通りに

一番町、二番町、三番町として町屋敷に下さる。」

(註12)『飛州軍乱記』(所収：『神岡町史特集編』)

「高山に新城を築き、遠藤宗兵衛に千五百石の知行を与えて高山の城代とせり」

(註13)『田能村記』(所収：『飛騨遺業合府』)

〔慶長5年(1600)〕「福業氏當国へ可討入にて(中略)宗運一兩日過ぎて高山へ出て遠藤宗兵衛本丸に居る所へ行って家老衆一座談合し云々」

(註14)『願生寺由来記』(所収：『高山別院史資料編』)

「松倉断絶の事人足今日も今日もに夜ふかから、春持ち石担ひ夏冬通しに憂き事に会ひて、今の城山は北の尾崎を国中の人足寄り集まり、遙か引下し云々」

(註15)『古裡怪異』(所収：『飛騨遺業合府』)

「高山御城御普請の町京都より金森法印公兼ねて御願染にてやありけん大工儀左衛門といふものを飛州へ御召ければ當所へ罷越三ヶ年餘相勤め夫よりまた京都へ帰りける然に當国滞留の内に石浦村に大工長兵衛といふものありけるが同職の連に懇意にいたし云々」

「慶長11年(1606)建立の水無神社拝殿棟札より抜(所収：『飛州志』)

「作事奉行濃州住人宗清・同(大工)棟梁越中国住人小右衛門尉以之」

「一之宮神社手伝之事・定書」より抜(所収：『飛州志』)

「他国之大工並諸職人云々」

第3節 高山城の規模と城下町

高山城の名曲輪は、本丸が東西57間に南北30間、南之出丸が東西15間に南北22間、二之丸が東西97間に南北84間、三之丸が東西120間に南北93間の広さがあった(註1)。

挿図10 高山城曲輪、建物配置図

〔「飛騨国高山城図」(金沢市立図書館蔵)及び「飛騨高山城地形図」(同)により作成〕



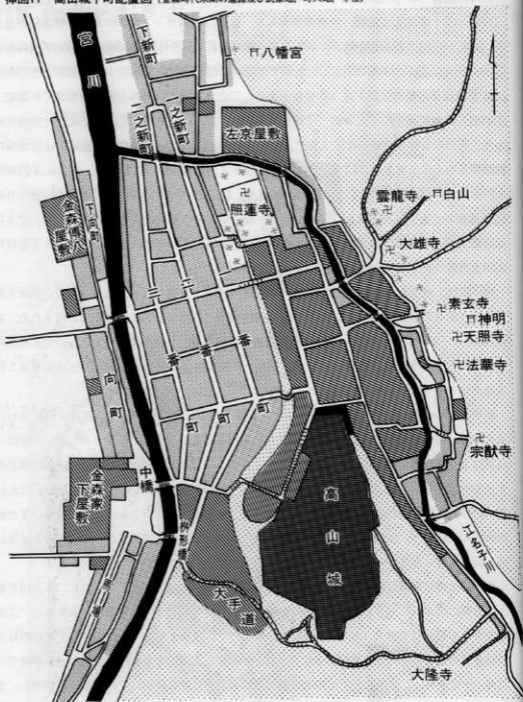
当時の絵図(註2)によると、本丸には最高所に㊦本丸屋形、その東方一段低い所㊧に㊨十間櫓、㊩十間櫓㊪太鼓櫓、㊫横櫓等があり、東北に㊬搦手一ノ木戸のある㊭腰曲輪が連なる。本丸から南へ下ると途中に大手の㊮三ノ門、㊯二ノ門をへて㊰岡崎蔵や㊱大手門のある㊲南之出丸に至る。本丸の北方二之丸に下る途中には㊳中段屋形が建つ㊴曲輪と、その西方には㊵塩蔵その他の土蔵が建つ㊶曲輪がある。二之丸は東西に大きな曲輪が並んでいるが、㊷西側の曲輪には㊸二之丸屋形、㊹黒書院を中心に西方に㊺唐門、㊻屏風土蔵㊼十間櫓等があり、東側の曲輪との境には㊽玄閤門、㊾中ノ口門がある。一方㊿東側の曲輪には㋀庭樹院殿屋敷を中心に、東北隅に㋁鬼門櫓、東南に㋂東之丸長屋に続いて㋃裏門、西方には㋄横櫓大門がある。㋅大門を西方に下った㋆曲輪には、㋇桜門の西側に㋈炭蔵、東側に㋉荷作り蔵、㋊料紙蔵等があり、その東北方に連なる㋋曲輪には2棟の細長い㋌土蔵が建つ。㋍三之丸には㋎勘定所と8棟の㋏米蔵があり、水堀が東側と北側をくの字形に囲んでいる。大手道は南之出丸西側の大手門から大洞谷を下って櫓形橋に通じている。

城下町は、城の北方に延びる通称空町と呼ばれる高台と、その西方の低地一帯で、西側を南から北へ流れる宮川と、東側を南から北、途中で西側へ折れて流れる江名子川に囲まれた、東西約500メートル、南北約600メートルの範囲内に建設された。城郭の築城とともに武家屋敷の地割(註3)が行なわれ、飛驒の各地から寺院や町家が移された(註4)が、町割は武家地と町人地がはっきり区分されていた(註5)。

武家地(註6)は城の大手筋にあたる大洞谷から中橋に至る宮川の右岸に階段状に配され、また空町一帯から江名子川ぞいに城の西・北・東の三方を取巻く形で配置された。町人地(註7)は宮川と空町の間の低地に一番町、二番町、三番町と南北に道路が走り、東西の道路は南北の大通りと食い違つて交差する横丁が多くあった。社寺地(註8)は東山山麓に大雄寺が天正14年(1586)に建てられたのを始めとして、天照寺、雲龍寺、素玄寺、宗猷寺、法華寺、また城の東南に大陸寺と、金森家に由諸の寺院が相次いで建立された。またこれらの寺院群とは別に城と向かい合った場所に照蓮寺が建てられ、(註9)周囲に寺内町が形成された。

金森時代の初期頃は宮川と江名子川の内側に取まっていた城下町も、次第にこの2河川を越えて外側に広がっていった。元和9年(1623)三代重頼は江名子川を照蓮寺の東北地点で宮川に向かって西向に切替え(註10)、その北岸に分家の左京屋敷を配し、また町の西方宮川の対岸には重頼の家中の者のため下屋敷が建てられ、そのまた北方にも重頼の弟傳八の屋敷が建てられた。一之新町、二之新町、下新町の町名は、町が次第に北に発展していったことを示し、また向町、下向町の町名は、川の東側から見た町名で、家並みが宮川の西岸を南から北へと延びていったことを示している。

挿図11 高山城下町配置図(金森時代末期の道路及び武家地、町人地、寺社)



城下町絵図(高山市郷土館蔵)により、町並の配置を実際の地形に合わせて作図した。

高山城
 武家地
 町人地
 山地

(注1) 『飛騨鑑』(高山市郷土館蔵) 『榮太後風土記』 『飛州志』 参照

(3書ともに各曲輪の周数は一致しているが、二ノ丸の南北間については『飛州志』のみが86間と2間長い。)

(注2) 『飛騨国高山城図』、『飛騨高山城地形図』(金沢市立図書館蔵。)

(両図ともに高山城在番中の金沢藩によって書かれたものと思われ、前者は全体、本丸、二ノ丸屋形、庭樹院殿屋敷の4図から成り、建物内の周取りが記された唯一の図で、後者は各建物の周数、各所の石垣の高さが記されている。)

(注3) 『安川記』(所収:『大野郡史上巻』)

「(天正)16年より譜土の知行割、城地及家中の邸宅、並に町家の地図検分あり。」

(注4) 『願生寺由来記』(所収:『高山別院史資料編』)

「方々所々の寺院を引遷るべしとの御触れにて三町は松倉石ヶ谷四十七軒を初め、七日町その外方々より七百餘軒の屋敷取り、上を下へと翻したる家はますます重なりぬ。」

(注5) 『飛州高山城在番記』(所収:『大野郡史中巻』—永井織部宛板板平内口上書—)

「侍町は町屋とは入込不申候」

(注6) 『高山在番之覚』(金沢市立図書館蔵)

(金森家転封直後の家数の記録によると武家地の家数は692軒あった。)

「侍屋敷百拾三軒、扶持人家屋敷三百五十四軒、足輕小者家数二百二拾五軒」

(注7) 「(同上)」(同上)

(町人地の家数は921軒で、この内715軒は三町地区に集中していた。)

「町屋屋敷七百拾五軒・町屋ノ九百二拾一軒。」

(注8) 「(同上)」(同上)

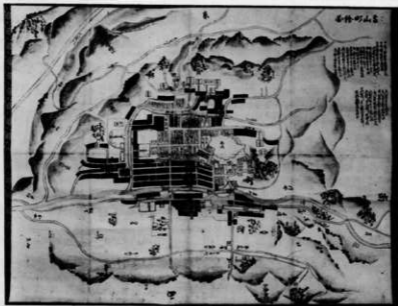
「拾六ヶ寺、三ヶ寺真言宗、五ヶ寺禅宗、一ヶ寺尼寺同、五ヶ寺一向宗、壹ヶ寺日蓮宗」

(注9) 『瓶江記』(所収:『高山別院史上巻』)

「城の地どりに相むかい、照蓮寺は城にそむかず、城はまた寺にさからはずして互に守り守らんと、寺をば城に向はしめ、城をば寺にむかして、仏法兼法語共に互に背かぬ和順の表事、めでたき所造の金とぞ聞えし」

(注10) 『宇野定賢日用宝』(所収:『飛騨春秋第1年第7号』「金森重頼江名子川切替について」)

「江名子川は東山麓より直に松山麓を北流して合峰に至て大八賢川に合して共に宮川に入たりしを元和九年癸亥金森頼三代出雲守重頼朝臣)弟重頼朝臣を分家左京と称し、高原郷の領主として其邸前の豪代に江名子川を折て正面へ堀通し宮川に繋ぎ其旧蹟を田畑に開拓云々」



図版 6 高山城下町絵図

第4節 高山城主金森六代

高山城には長近以後元禄5年(1692)頼岩が転封となるまでの間金森氏が六代にわたって在城した。金森氏は美濃国守護土岐氏の出身で、土岐美濃守成頼の次男兵部少輔定頼は山形郡大桑村に住し大桑姓を称し、のち土岐郡大畑村に移った。その子大畑七右衛門定近の次男が飛驒の領主となった金森長近である。

長近は大永4年(1524)美濃に生まれ、五郎八、可近と称したが、のち近江の金森に移り住んで金森姓を名乗った。(註1)天文10年(1541)18歳で織田信長に仕え、弘治元年(1555)桶狭間の戦、の功により信長の諱字を賜り長近と改めた。天正3年(1575)長篠の戦、後の北陸一向一揆討伐の際は越前大野に討入り、鎮定後はその功により大野付近を賜わり大野城を築いた。天正10年(1582)の本能寺の変、では織田信忠に仕える実子長則が二条城にて没したが、長近はこの年剃髪して兵部卿法印と号し、のち高山城下にその菩提のため雲龍寺を建立した。天正11年(1583)の賤ヶ岳の戦、では柴田勝家に属したが、それ以後は豊臣秀吉に仕えた。天正13年(1585)秀吉の命により飛驒を平定し、のちその地を賜った長近は天正16年(1588)高山城の築城およびその城下町の整備にとりかかり、城の鎮護のため城続きの山腹に杉ヶ谷神明神社を再興した。(註2)文禄2年(1593)には秀吉の伏見城築城に出役し(註3)、同地に屋敷を賜わっている。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦、では徳川家康に従い、以後飛驒一国(三万八千石)を養子可重に任せ、加増の地美濃上有知(二万石)へ移り小倉山城を築いた。慶長13年8月12日没、法號金龍院殿前兵部尚書法印要仲素玄大居士。

二代可重は長近の家臣長屋将監景重の子で、永禄元年(1558)美濃に生まれ喜藏と称した。天正3年(1575)の越前討入後長近の養子となり(註4)、金森家の飛驒領国の時には古川郷(一万石)を賜わり増島城を築いた。関ヶ原の戦、の後飛驒一国を任せられ、長近没後の慶長13年(1608)10月正式に受け継ぎ、養父の菩提のため城下東山に素玄寺を建立し(註5)、同17年(1612)一本杉白山社を再建した。また国外では慶長9年(1604)彦根城石垣普請、同14年(1609)京都の大仏殿の造営奉行、その翌年には名古屋城の石垣普請に出役している(註6)。慶長20年(1615)閏6月3日没、法號徳心院殿前雲州大守雲峰閣公大居士。可重の長男重近は京都に住し剃髪後宗和と號し、茶道宗和流、の開祖となっている。

三代重頼は可重の三男で文禄元年(1592)に生まれ、元和元年(1615)7月父の遺領を賜り、その年国分寺の塔を再建した。元和5年(1619)高山城内に東照権現を祀った(註7)が寛永5年(1628)城の西方西之一色に東照宮を建てた。元和9年(1623)左京屋敷を築くにあたり江名子川の川筋を替え、その時桜山八幡社を再興した。(註8)寛永9年(1632)弟左京重勝と共に父の菩提のため、東山南端に新安国寺(のちの宗献寺)を建立した。(註9)正保2年(1645)

花里天満神社を再建、ほかに宮川の西岸に金森家の下屋敷を建てた(註10)。慶安3年(1650)10月7日没、法號真龍院殿前雲州大守瑞雲宗祥大居士。

可重の五男重勝は高原郷(三千石)を分知され(註11)、高山城下の江名子川北岸に左京屋敷を建てた。左京家は重勝没後、慶安3年(1650)11月に頼母重直(註11)、次いで明暦元年(1655)7月左京近供(直教)(註13)が家督を継いだ。近供は本家頼岩の家督相続の際その後見人となっている。のち金森家が改易となった時、左京家は越前の南条・今立付近(三千石)を賜わり明治維新に至っている。

四代頼直は元和5年(1619)に生まれ、慶安3年(1650)12月父の遺領を賜った。承応2年(1653)城山の南東に大陸寺を建立し、万治3年(1660)千光寺を再興した(註14)。寛文4年(1664)4月5日長近以来始めて領地朱印状が下附されたが、六万石余の内高分を願い出たのに対し慶長検地の時と同じの三万八千七百六拾四石四斗のままであった。寛文5年(1665)7月18日没、法號大陸院殿前長州大守立軒素白大居士。

五代頼業は慶安元年(1648)に生まれ、寛文5年(1665)9月父の遺領を賜わり、同10年(1670)一之宮の二王門を造立した(註15)。寛文11年12月28日24才で早世、法號照見院殿前飛州大守覺法宗円大居士。

六代頼岩は寛文9年(1669)に生まれ、幼名を万助といい、同12年(1672)3月5日家督を継いだ。幼少であったため左京近供が後見人となった。貞享2年(1685)西之一色の山王宮を再興し、元禄元年(1688)江名子の錦山稲荷を再建した。元禄2年(1689)6月五代將軍綱吉の側用人となったが同年8月解任され、元禄5年(1692)7月28日出羽上ノ山へ転封を命ぜ

系図1 金森家系図



られた。しかしそれからわずか5年後の元禄10年美濃郡上八幡へ再転封となっている。元文元年(1736)5月23日没。法號佛龍院殿前雲州大守静翁觀山大居士。郡上における金森氏は頼岩のあと孫の頼錦が継いだ。郡上宝曆騒動により宝曆8年(1758)12月25日改易となった。

(註1)『(金森家)系譜』(所収:『金森系譜』)

「本家衰微之時近江国金森村江父采女ト一所ニ遷越申候而改氏金森五郎八ト申候」

(註2)『變太後風土記』

「金森公高山城をきつかれし頃、鎮護を祈り、ここに勧請して祀らせしとぞ」

(註3)『飛騨編年史要』

「文禄三年正月某日。秀吉諸大名へ讓して山城國伏見に築城し、金森素玄に知行高三万三千石に対する夫役を命ず」

(註4)『金森家譜』(所収:『金森系譜』)

「天正三年乙亥於越前有戦功長近感之為養子于時十八歳」

(註5)『高山市史下巻』一妻玄寺の項一

「長近公慶長十三年八月十二日逝去せられ、其追善の為に同十三年十月起工翌慶長十四年四月建立相成り、格前門越和尚を住持せしめたり、(中略)創立以来国主金森家菩提所として金森家歴代の位碑を安置し供養し來たり。」

(註6)『慶長留記』(所収:名古屋城と天守建築)

「御城経営懸り諸大名來諸取町場開放の坪数」

同(町場)百八拾九坪四分 金森出雲守

(註7)『大野郡史上巻』

「四月 重頼、高山城内に東照権現を勧請す。」

(註8)『住野冊子』(所収:飛騨春秋第1年第7号)『金森重頼江名子川切替について』

「宮川に幾其田碓(もとのかわら)を田畑に開拓の時砂中より赤銅の古靈像を掘出ぬ、諸人評せしに古しへ此山腹大杉下に八幡宮鎮座在しと古老の説とて候へ言士せり、候大悦て其大杉下の旧跡に新に社殿増築を修造華表を建て高山城中及巖邸の鎮座とし云々」

(註9)『明治十二年寺院明細帳』(所収:『高山市史』)

「寛永9年、高山城外此地ニ梵刹ヲ新築シ師ニ請フテ此地ニ住セシム新安国寺ト云フ、其後改メテ宗祇寺ト称ス、是源重頼、法号真龍院殿ト云フ、依テ真龍山ト号シ金森左京重勝ノ法号宗祇居士ト云、依テ、宗祇寺ト号スルナリ。」

(註10)『睡人雑話』(所収:『大野郡史中巻』)

「出雲守重頼殿息女之内、文鏡院殿、清正院殿、松寿院殿(中略)三女居家を向屋舖と云ふ。」

(註11)『變太後風土記』

「飛騨國領主金森二代出雲守可重は、江馬十六代輝盛滅亡後、其女を取へて、妾として男子出生せり。幼名を金森小四郎と號、後に金森左京重勝と名乗せ、外戚江馬家の縁に因て、元和年中高野郷三千石の領主とせり。」

(註12)『金森左京系譜』(所収:『金森系譜』)

「重直 頼母 左京家二代之主、本家出雲守重頼六男妾腹也」

(註13)『同上』(同上)

「近供 仙千代 左京 左京家三代主、本家長門守頼直二男」

(註14)『飛州志』一袈裟山千光密寺(再興棟札)より抜一

「萬治三庚子年九月吉祥日、奉行森興三左衛門尉直次、大工頭中井甚次郎」

(註15)『往還寺山門棟札』(所収:『大野郡史中巻』)

「奉行森右衛門九郎、曾我源之丞、奉行後藤十兵衛、矢野七郎右衛門、大工藤原朝臣池守猪之助正勝」

第5節 高山城の石垣修築（巻頭図版1，2）

現在飛騨に流布している高山城絵図は寛文3年（1663）と延宝4年（1676）の絵図の写しが多い。これらは城の石垣修理のため破損箇所を図示して幕府へ提出したもので、両図とも二之丸・三之丸付近は建物をのぞいて平面的である。しかし寛文の図は本丸付近が立体的に書かれているのに対し延宝の図は本丸・南之出丸までが平面的で、二之丸・三之丸に比して広く誇張され描かれている。城の改修について幕府に何を立てることは、寛永12年（1635）に公布された武家諸法度において規定されている。（註1）

寛文2年（1662）5月1日近畿・中部地方から関東にかけて大地震があり（註2）、各地の城や都市が被害を受けている。（註3）この時高山城の二之丸庭樹院殿屋敷の北側石垣㊿が破損し（註4）、翌寛文3年2月8・9両日の大雨で大きく崩れ、また二之丸屋形北側石垣㊾は寛文2年の地震により大きく張出している。（註5）これに対し四代頼直は寛文3年4月22日幕府の老中稲葉美濃守正則宛に、石垣の破損箇所を朱引した絵図を提示したが（註6）受け入れられず、さらに詳細に書き5月6日再提出し、同月8日に返書が届いている。（註7）

のち延宝3年8月12日大雨により、二之丸西方の土蔵の石垣㊿（註8）、次いで9月10日には南之出丸南東の石垣㊿（註9）が崩れた。また本丸東拾間櫓下の石垣㊿（註10）、二之丸大門の北側に続く石垣㊿（註11）、二之丸屋形北側の腰曲輪にある荷作り蔵北隅の石垣㊿（註12）が^{註12}壊れている。これに対しては延宝4年3月14日六代頼曾の後見役左京近侍が修理箇所を図示した絵図（註13）を幕府へ提出しており、延宝8年

挿図12 高山城石垣破損箇所位置図



石垣の再築が成っている。(註14) 以上高山城石垣修築は前後2回行なわれたことが絵図の記録によって窺われる。

(註1) 『武家諸法度』(寛永2年6月改正、第3条)

「新規之城郭構営堅禁止、居城之隙礮石壁以下改壞之時、違奉行所可受其旨也、櫓門等之分者、如先規可修繕事」

(註2) 『日本地震資料第2巻』

「寛文二年五月一日〔山城・大和・河内・和泉・摂津・丹波・若狭・近江・美濃・伊賀〕駿河・三河・信濃・伊勢・武蔵 十二月まで余震」

(註3) 『同上』(所収諸文献より抄出)

(この時被害を受けた城は、大阪・二条・摂津尼ヶ崎・同高槻・和泉岸和田・丹波亀山・若狭小浜・近江膳所・同彦根・伊賀上野・伊勢亀山・同津・同桑名・越前福井・尾張犬山等)

(註4) 『寛文三年卯四月廿三日、高山城絵図』(図中書入)

「石垣高サ三間之所東西貳拾間半高サ二間之所南北五間都合貳拾五間半去年寅五月朔日之地震小破仕候上ニ又当年卯二月八日九日兩日之大雨ニ大破仕候」

(註5) 『同上』(同上)

「今一々所朱引仕候處之石垣去年寅五月朔日之地震小破仕候石垣高サ四間半ニ御座候比所ハ石垣崩申候得者朱引仕候所東西八間程張出申候」

(註6) 『同上』(同上)

「右朱引仕候所之石垣崩所破損仕候分先規修復仕度奉願候」

(註7) 『同上』(貼紙の書入全文)

「石垣崩之所朱引如此被成卯四月廿二日稲葉美濃守様江御持參被成候處石垣崩之所書書込尔不及之間壁之覆石垣如惣構之絵図書直シ御持參可有之由御差圖ニ付崩崩有様ハ絵図不御付如惣構之壁之覆石垣委絵図御書七崩之所壁之土台石垣之境ニ朱引被成卯五月六日ニ美濃守様江御持參被成候處ニ絵図御収被成候以上卯五月六日五月八日ニ美濃守様ヨリ御奉書奉候」

(註8) 『延宝四年三月十四日、高山城絵図』(図中修理箇所書入)

「ニノ九西ノ方北面土藏之石垣表西貳間高貳間去年卯八月十二日夜大雨仕崩申候」

(註9) 『同上』(同上)

「本丸之内南之方出丸石垣南北四間高壹丈去年卯九月十日大雨ニ而崩申候」

(註10) 『同上』(同上)

「本丸東之方倉下石垣南北七間高三間半孕申候」

(註11) 『同上』(同上)

「二九西之方榭下石垣南北拾三間高四間貳尺孕申候」

(註12) 『同上』(同上)

「二九北土藏下角石垣西表北表三間ツツ高四間ツツ孕申候」

(註13) 『同上』(図中願書書入全文)

「一、本丸之内南之方出丸石垣南北四間高壹丈去年卯九月十日大雨ニ而崩申候

一、本丸東之方倉下石垣南北七間高三間半孕申候

一、二九西之方北面土藏之石垣東西貳間高貳間去年卯八月十二日之夜大雨仕崩申候

一、二九西之方榭下石垣南北拾貳間高四間貳尺孕申候

一、二九北ノ土藏下角石垣之表三間高四間孕申候

右五箇所石垣破損仕候間如元基直シ申渡奉存候万幼助少ニ候故如斯御座候已上

延宝四年丙辰三月十四日 金森左京(印判)

(註14) 『金森家譜』(所収：金森系譜)

「同(延宝)8年度申達 台懸再築高山城石垣」

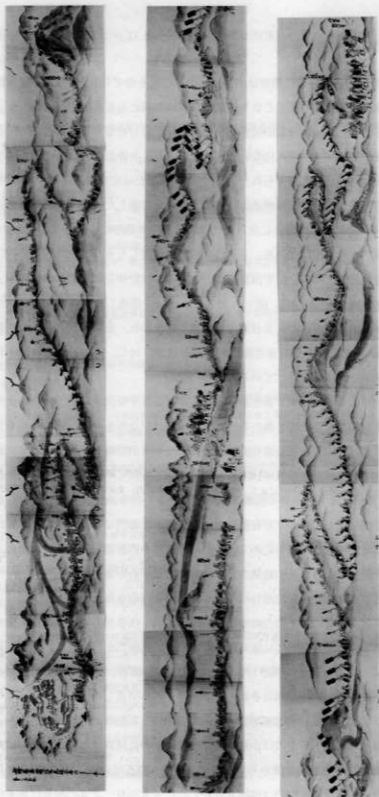
第6節 金沢藩の在番と廃城

元禄5年(1692)7月28日六代頼岩は出羽上ノ山へ転封を命ぜられ、8月18日関東郡代であった伊奈半十郎忠篤が飛騨代官兼務となり、以後飛騨は天領として幕府の直轄地となった。同月22日金沢藩主前田加賀守綱紀は高山城在番を命ぜられ、翌日在番奉行永井織部正良となし、26日在番中の積米及び金子諸道具について定めた。9月1日伊奈代官は高山城の請取、また浅野伊左衛門正氏はその目付を命ぜられた。同月10日前田綱紀は在番諸士に対し、勤番中の任務・生活・治安等37カ条から成る「飛州高山在番諸法度」を告諭した。同月12日金森頼岩は書状を以て左京近供に、素玄寺・大隆寺に在る歴代遺骨は京都大徳寺塔中金龍院(註1)へ移し、寺坊はそのまま残すことを告げている。9月11日江戸を出発した永井織部は19日金沢に着き、準備を整え24日在番諸士と共に金沢を出発した。10月1日浅野伊左衛門が高山に着き、金森家給人の城下町引払い期限を申し渡し(註2)、翌2日高山城を巡見した。同日永井織部以下金沢藩の在番諸役人が高山へ到着した。3日高山城引渡が行なわれ、金森家役人から永井織部へ城が引継がれた。(註3)のち11月26日永井織部から在番諸士に対し、高山町人とのかわり等に関する14カ条の諸注意が申し渡されている。

元禄6年(1693)4月26日第2番在番奉行藤田平兵衛以下金沢を発し、29日高山へ着、翌日在番を交替。同年10月6日旧第3番在番奉行津田求馬以下金沢を発し、11日在番を交替。元禄7年(1694)5月16日第4番在番奉行野村五郎兵衛以下金沢を発し、21日在番を交替。この年9月11日高山城下の食料品や家数等14項目が金沢に報じられている。またこの頃美濃大垣藩主戸田采女正は幕命によって飛騨の検地を開始している。同年9月26日第5番在番奉行山崎源五左衛門以下金沢を発し、10月1日在番交替、同月源五左衛門は高山城内の諸武具の配備、人員配置及びその場所の守り方等を定めている。この期間中の普請方の記録によると、城内に崩れそうな石垣が数ヶ所あり、その補強が行なわれたことがわかる。(註4)

元禄8年1月7日、第6番在番奉行に和田小右衛門が任命されたが、前田綱紀は12日高山城破却の幕命を受け、19日にはそのための横目に矢部権丞、作事奉行に近藤三郎左衛門、普請奉行に前田清八、次いで2月10日には破却総奉行に奥村市右衛門が任命された。24日高山城破却に要する諸道具と人数を見積り(註5)、3月1日破却時の廃材、石垣、城内に残る米や諸道具等の処置について幕府に伺い、18日それらを伊奈半十郎へ引渡した。

同年4月9日破却奉行奥村市右衛門以下金沢を発し15日高山着、破却は22日本丸三階櫓から着手され、城郭内の建物・石垣のほか城下の侍屋敷も同時に破却された。破却開始の日伊奈半十郎は役所をそれまでの武家屋敷から金森家の下屋敷へ移している。(註6)5月25日には金沢藩の和田小右衛門、塩川安右衛門は破却を巡見した。6月10日三之丸の掘を江名子川へ掘抜き



図版 7 高山城在番第 2 番 藤田平兵衛 以下湯路の行列図 (金沢市立図書館所蔵)

魚類を放ち、16日には本丸・二之丸・三之丸・武家屋敷の建具等の員数帳を伊奈代官へ提出し、18日普請奉行以下高山を立出た。天正16年の築城始めから約107年後の廃城であった。

(註1)『聖野大徳寺』(文中抜)

「大徳寺塔中で、文禄元年(1592)長近によって創建され、自らの法號を以て名付けられた。明治22年(1885)同寺塔中龍源院へ合併され、同所に金森家歴代の墓所も移された。」

(註2)『小池由之助氏所蔵文書』(所収：『大野郡史中巻』)

「今度當領所替に付、給人城下引拂之儀、今日より三十日限たるへき事。」

(この達しにより金森家士は翌2日高山出発、古川に10日滞在後同月28日上山へ着いている。)

(註3)『高山在番記』(金沢市立図書館蔵)

「即克在番ノ面々高山城大手柵門ニ人数備立上使浅野伊左衛門殿御代官伊奈半十郎殿次金森兵庫(金森出雲守殿家老)義四郎左衛門津田孫太夫斎藤新左衛門(各回家老)等登城ス此跡ニ隨ヒ織部宗左衛門總殿清左衛門源七郎為兵衛藤左衛門(各羽織敷付)七人次ニ葛巻圖書横山牛之助中川長吉湯原長十郎安宅覺左衛門羽田帯刀森田小左衛門(各羽織敷付)七人帯刀シナカラ竹之間ト名目有之所ニ至ル出雲守殿家老七人(各布上下)判居互ニ黙礼シテ入替ル城引渡シ相済シ以後伊左衛門殿江梨斗龜湯原長十郎(布上下)役之事畢テ伊左衛門殿退去竹之間ニテ各トシテ參着苦勞之由及会釈云々上使退去后柵門ニ有之鉄砲弓長柄侍中入手城中」

(註4)『飛州高山在番御普請方御入用帳』(抜書)(金沢市立図書館蔵)

檜丸太長六尺ヨリ三間半迄梁口三寸ヨリ五寸迄 拾三本 御本丸石垣突木 四本 二ノ御丸石垣突木

栗丸太長七尺ヨリ老丈四尺迄梁口三寸ヨリ五寸迄

拾老本 三ノ御丸石垣突木

檜長八尺ヨリ武間迄幅五寸ヨリ八寸迄厚三寸ヨリ四寸迄 御本丸石垣押木すり木 二之御丸石垣押木すり木

(註5)『飛州高山廃城一巻』(金沢市立図書館蔵)

「四百八十人 大工

一万四千八百人 屋形数人足 但屋形等三之丸内御貸家共、坪数四千九百二十八坪 一坪に三人懸り

七千五百人 石垣数人足 但石垣総坪数千八百六十七坪 一坪に四人懸り」

(註6)『睡人夜話』(所収：『大野郡史中巻』)

「初元禄五年申年御料所に相成の時、金森兵庫居家並渡辺外記、宇津宮藏次郎、国友居家合て為官庁或は会所とも称す、其後元禄八文年城地破却に付今之地へ引移に成る。則出雲守重頼殿息女之内、文鏡院殿、清正院殿、松寿院殿の三女以居宅本陣とす、四月廿二日引移し有之」



図版 8 高山在番記



図版 9 高山在番御普請方御入用帳



図版 10 飛州高山廃城一巻

第7節 城跡の変遷

高山城の破却は元禄8年(1695)6月に終了したが、8月伊奈代官は城地・侍屋敷の跡地の処分について勘定所に伺い、結果高山の町人715軒へ割地し渡すこととなり(註1)、また11月には城や侍屋敷に残っていた道具や樹木の払い下げが行なわれ(註2)、のち元禄10年(1697)6月侍屋敷の割地に対して割地の方法等を定めた証文が出された。

元禄15年(1702)8月2代代官伊奈半左衛門は飛騨の山林取締のため山見役を置いたが、大野郡・吉城郡・益田郡に105人のほか城山にも1人を割当てている。

安永年間(1772-1781)には金森氏移封後無住となり荒廃していた大隆寺が再建された(註3)。

文化5年(1808)5月16代田口郡代の元締員塚素牛の内命により、三之丸跡の堀の清掃を行い、この年城山に桜が植えられた。また翌年には山内に茶屋等ができて次第に町民の憩の場となった(註4)。

文政3年(1820)三之丸の堀端に³金の神、の祠が再建された。(註5)

天保7年(1836)には19代大井郡代の元締菊田秋宣らによって、素牛の追悼のため⁴白雲山桜花碑、が建てられた。(註6)

天保13年(1842)には凶年対策として三之丸跡に⁵圓穂郷藏、が建てられた。
(以下明治以後は編年で記す。)

明治6年 太政官布告第16号を以って国有公園となる。

明治8年7月15日、⁶古城跡公園、設置を願出、10月16日許可。戸長ら実地調査を行う。

明治11年12月16日、吉城郡坂下村の⁷保寿寺、移転の発願が出され、二之丸跡に移転す。

明治12年4月21日、三之丸跡に⁸神道中教院、が落成し、その地は忠孝苑と命名された。

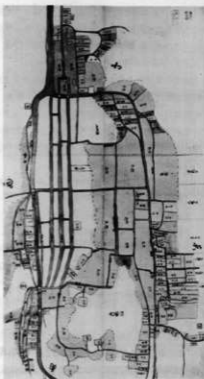
明治25年11月12日、⁹高山公園、を飛騨三郡の所屬と定め、大野郡長の管理となす。

明治29年7月20日、二之丸東方斜面が崩れ、鳥川原付近の民家多数が被害を受けた。(註7)

明治38年6月1日、¹⁰高山公園、を高山町の管理とし、¹¹城山公園、と改称した。

図版11

高山城下割地絵図(高山市郷土館蔵)



- 明治39年9月27日、中佐平に^レ広瀬中佐、の銅像が建ち、その除幕式が行なわれた。
- 明治42年6月16日、三之丸跡に^レ飛驒招魂社、が建つ。
- 明治43年4月 二之丸跡に^レ押上中将寄付の戦利品の大砲設置。(のち昭和16年供出)
- 大正2年10月31日 付近の大火のため、三之丸跡西北地内にあった民家が焼失。
- 大正3年 三之丸跡忠孝苑の大改修が行なわれ、招魂社の社殿が修復される。
- 大正3年8月30日 三之丸跡に^レ大野郡公開堂、が竣工し、翌年4月23日落成式が行われる。
- 大正13年6月2日 ^レ二之丸グランド、の竣工式が行なわれ、同所で小中学校連合運動会を開催。
- 昭和5年 二之丸グランド東面の石積工事。三之丸跡の堀の東、北面に壁提築く。
- 昭和9年3月6日 岐阜県指令により高山城跡が史跡となり、4月30日その標石が建つ。
- 昭和14年4月1日 招魂社を^レ飛驒護国神社、と改称、11月本殿竣工し遷座祭を行なう。
- 昭和16年4月16日 二之丸跡に^レ飛驒武徳殿、建つ。(昭和22年11月山王小へ移転。)
- 昭和24年11月 二之丸跡の^レ保寿寺、吉城郡舟津町へ移転する。(現在の円城寺)
- 昭和27年4月 白雲水下から山王公園までの道路完成。
- 昭和27年春 城山一周ドライブウエー着手。(昭和31年完成。)
- 昭和29年2月18日 本丸屋形跡の^レ暴風雨信号灯保管庫、焼失。
- 昭和29年7月 三之丸跡に^レ城山保育園、竣工。
- 昭和30年9月 二之丸跡から本丸跡に警報用サイレンを移し、その鉄塔が建つ。
- 昭和31年2月24日 高山城跡^レ岐阜県指定史跡、となる。
- 昭和31年4月4日 都市公園法適用指定。
- 昭和31年4月5日 ^レ風致地区、に指定 (47.5ha)
- 昭和31年6月14日 ^レ高山城跡及びその周辺の野鳥生息地、指定
- 昭和31年12月1日 三之丸跡飛驒護国神社東側に^レ久和司神社、が建つ。
- 昭和32年9月27日 桜門のあった曲輪跡に福来博士記念館開館式。
- 昭和35年1月19日 二之丸跡に白川郷の^レ照蓮寺、移築完成。(前年4月1日より基礎工事始)
- 昭和35年9月23日 二之丸跡照蓮寺前に遊園地、休憩所、野外音楽堂等が完成。
- 昭和36年11月15日 三之丸跡護国神社東方に^レ飛驒匠神社、が建つ。
- 昭和38年9月12日 二之丸跡の野外音楽堂を^レ鳥類舎、に改造す。
- 昭和38年12月 桜門跡前に^レ動物舎、が完成。クマ、キツネ、タヌキ、イノシシ、アナグマを飼う。
- 昭和39年7月 中佐平裏地に^レ鹿の家、完成。
- 昭和41年6月13日 二之丸グランド中央に^レペンギン池、完成。

- 昭和42年3月30日 鳥獣保護区、特別保護区指定 (53ha)
- 昭和44年 京都の植藤造園により、二之丸照蓮寺前の石庭を整備。
- 昭和45年9月1日 都市計画法に基づく²都市計画公園、に指定。
- 昭和45年9月 旧大手道途中に枳形門風の³模疑石垣、できる。
- 昭和45年11月 二之丸グラウンドを⁴芝生の公園、に改修。
- 昭和46年7月13日 照蓮寺の⁵防火設備、完成。中段曲輪跡にその⁶貯水槽、できる。
- 昭和46年7月15日 ⁷城山を守る会、結成。9月に『城山公園の報告書』発行。
- 昭和48年3月1日 中佐平上の⁸冬頭屋、を撤去。
- 昭和49年4月 ⁹城山ドライブウエー、自動車乗入禁止。
- 昭和49年9月 城山の動物園、閉鎖。
- 昭和55年4月20日 飛騨護国神社の¹⁰社務所、と¹¹遺品館、竣工。
- 昭和57年10月12日 ベンギン池跡地に¹²金森長近公の銅像、完成。
- 昭和58年3月4日 三之丸跡に¹³城山保育園、及び¹⁴児童センター、完成。

(註1) 『飛騨國中案内』

「城跡は格別、其外侍屋敷破却の跡地は高山本町七百拾五軒の者共へ割地に被仰付、起立家一軒へ何様屋敷地五間にて二十間余、大概百坪の余程割附に被仰付、相応の見取御年貢差上げ田畑に致す」

(註2) 『高山庄屋御用留』(所収:『大野郡史中巻』)

「今度高山御城破却道具、並侍屋敷破却道具、其外樹木御払に被仰付候間、望之者は明日より来る廿六日迄之内、御会所之参、入札注文写之入札可致旨、触下村々へ可被相触候」

(註3) 『鯉魚のやどり』

「元来無壇地金森家因替之後は空地同様にて(中略)安永の頃曹洞宗の大徳宗龍和尚京都金龍院より請求め、古堂を毀屋舗を穿ちて田となし、はるか上なる山を引ならしあらたに本堂禅堂庫裡等造立云々」

(註4) 『鯉魚のやどり』

「城山西南大洞という所、水茶屋鉢飯屋寺烏屋左七建之、東南大隆寺統には田楽茶屋出来、宝龍院には揚弓場建、所々遊戯之地と相成候」

(註5) 『鯉魚のやどり』

「辰年城山北の端圍の上に去年より祠を建、鍍金の神と今年五月四日・五日始て祭を執行し群参あり。是は先年二之丸谷間之岩の上にちいさき祠を置(中略)其祠を今再建」

(註6) 『白雲山桜花碑の文面』(所収:『高山市史上巻』)

「今はむかし貝塚前此園につかへまつられけるとき此処の人々とはかりて、この尾の上に手つからも、人しても桜木多く植えられけるか、今もいとめでたく栄えたりける、かの箭のみやひたるころさしを被て、こたび又さらにあまたの箭種そへ、そのかみ口すさまじける箭の匂を石にえりつけて、残してんとてかくはものしつ。

植てなは花に命のをしきかな 故 素牛翁 (以下10句略)

(註7) 『高山町役場日記』(所収:『高山市史下巻』)

「宇古城跡東面高二十五間、上中十五間、下中三十間全陥落時午後八時三十分頃人家二十戸潰落死傷あり」

参考文献

- 『飛州志』（飛騨叢書第一編） 岡村利平編 明治42年6月28日発行
〔（原本） 飛騨7代代官長谷川忠崇著
（忠崇在任期間 享保13年（1728）8月～延享2年（1745）3月）〕
- 『飛騨道乗台府』（飛騨叢書第三編） 岡村利平校訂 大正3年9月15日発行
〔（原本） 桐山力所編（力所 安政5年（1858）没）〕
- 『斐太後風土記』（飛騨叢書第四・五編） 住廣道編 大正5年7月25日発行
〔（原本） 富田札彦著（明治6年完成）〕
- 『飛騨國中案内』（飛騨叢書第六編） 岡村利平校訂 大正6年8月1日発行
〔（原本） 上村木曾右衛門満義著（延享3年（1746）完成）〕
- 『飛騨編年史要』 岡村利平著 大正10年11月5日発行
- 『飛騨国大野郡史』 田中貢太郎編 大正14年6月30日発行
- 『鯨魚のやどり』（蘭亭遺稿後編） 押上森蔵校訂 大正14年12月14日発行
〔（原本） 加藤步蕭編（步蕭 文政10年（1827）没）〕
- 『高山市史』 高山市 昭和27年11月3日発行
- 『茶野大徳寺』（茶道文庫6） 佐藤虎雄著 昭和36年9月1日発行
- 『金森系譜』 天野俊也編 昭和43年8月14日発行
- 『姓氏家系辞書』 太田亮編 昭和49年12月15日発行
- 『飛騨史考（中世編）』 岡村守彦著 昭和54年7月1日発行
- 『名古屋城と天守建築』（日本城郭研究叢書6） 城戸久著 昭和56年8月10日発行
- 『日本地震資料，第2巻』 東京大学地震研究所 昭和57年3月20日発行
- 『神岡町史，特集編』（飛騨国野史国説集成） 神岡町 昭和57年4月30日印刷
- 『高山別院史，上巻』 高山別院史編さん室 昭和58年5月15日発行
- 『高山別院史，資料編』 高山別院史編さん室 昭和60年7月31日発行

第4章 遺構

本年は、本丸上段部分200㎡の発掘調査と、本丸部分の平面測量を中心に調査を行った。雨落緑石の露出している箇所を「飛騨国高山城園」(註1)(挿図13)と突合させて、その部分が空地の北側にあたると推定した。この空地を中心に発掘調査をした結果、風呂屋部分の礎石群、広間南側の縁側礎石群、空地東側、南側に接する建物礎石群を検出した。

第1節 本丸遺構全体の遺存状態(挿図13, 14)

本丸上段と下段部分の比高差は約3.3mあり、水平に削平されている。しかし、埋め出した部分がほとんどないように思われ、地山を削り取った平地に礎石を配置し、地耐力上の工夫をしているものと考えられる(挿図16の礎石断面図参照)。山頂部にあって、遺構の覆土が各所で流出し、地山を構成する流紋岩風化帯の硬い部分まで露出している箇所もある。

また、本丸石垣の裏込め石に使われた栗石(10~20cm大の川原石)が、本丸西側に散在する。本丸下段部分の東北斜面(拾間槽、太鼓槽部分)に、約22m石垣が露出している。そして、本丸上段部分の南側にも4箇所、石垣が露出している。今後の発掘調査によって、遺存状態が確認できるであろう。

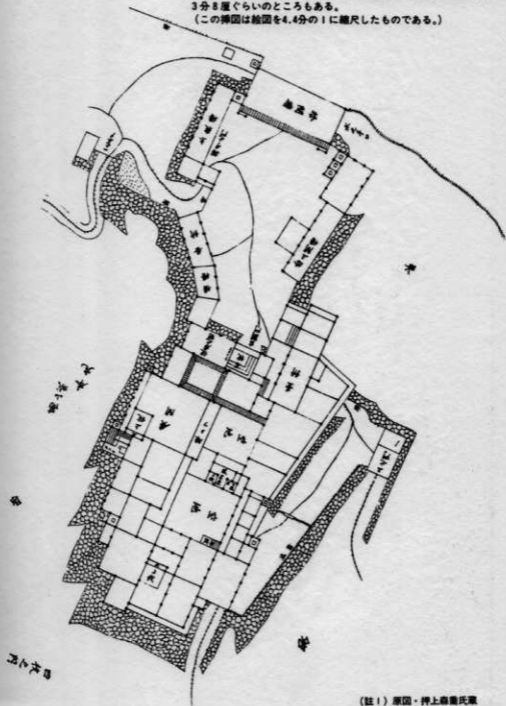


図版12 発掘された礎石(空地南側礎石群)

挿図13 飛騨国高山城図(本丸)

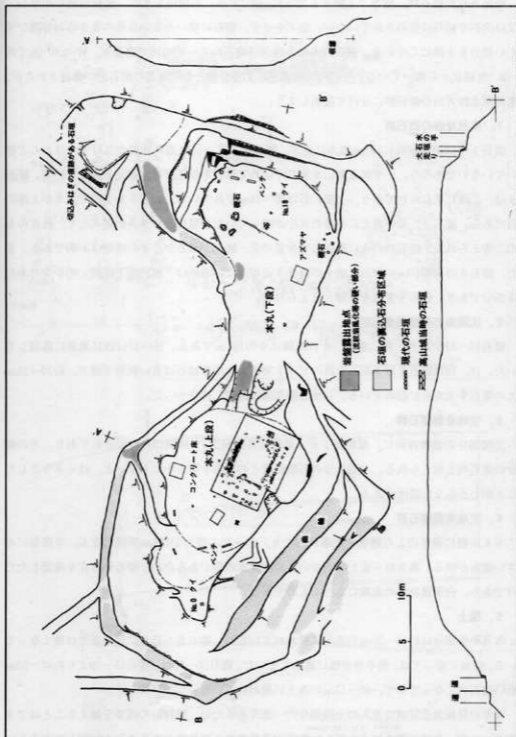
本丸(下段)東側に位置する捨間櫓の寸法によると、1間を3分7厘5毛(約1.14m)でへら引きしてあり、それによるとこの絵図の縮尺は約175分の1に作られていた。なお、他の箇所寸法を測ると1間が3分8厘ぐらいのところもある。

(この挿図は絵図を4.4分の1に縮尺したものである。)



(註1) 原図・押上森重氏蔵

挿図14 本丸全体平面図



第2節 発掘された礎石 (挿図15, 16)

検出された礎石は、標準で1間が6尺5寸(約197cm)の間隔をもつ。流紋岩製の川原石、又は山石で切石は使用されていない。加工をせず、礎石に使いやすい自然のままの石を選び平たい部分を上部にしている。礎石の方位を挿図15礎石No7~10の列で測ると、W-0.5°-Nで西へ0.5度磁北から傾いている。今回の発掘調査により空地とその周辺の礎石列が確認されたが、東西南北四方向の礎石群に分けて説明しよう。

1. 風呂屋跡の礎石群

礎石1~14が規則的に197cm四方に並ぶ。特に礎石7~10は遺存状態が良好で、ほとんど動いていないであろう。いずれも地山を掘りくぼめて礎石を据え付け、安定を図っている。礎石1は、二段に重ねられており、上部の石は南へ15cmずれている。礎石2も2段で、3が上部の石である。礎石2、12の直上に多量の炭片が残っていたが現代のガラスが混入して、後世のものと考えられる。礎石10の南に隣接して少量の炭、焼土が残るが、その性格は不明である。また、礎石6の南西40cmの箇所に焼土が遺存するが、この場所は「風呂屋下風呂」の中央にあたる部分であり、極めて重要な痕跡と考えられる。

2. 広間南方の縁側礎石群

礎石15~19が東西一列に並び、その間隔は平均197cmである。15~17は既に地表に露出していた。18、19は礎石を抜き取った跡のピットである。雨落縁石は良い状態で残り、約10~15cm大の栗石を犬走りに詰めている。しかし雨落溝は確認し得なかった。

3. 空地東側礎石群

玄関部分の建物西側に、板敷廊下が「飛騨国高山城図」(挿図13)に記されており、その部分の礎石列と考えられる。玄関部分の石段位置との関係を明らかにしないと、はっきりとしたことがわからない箇所である。

4. 空地南側礎石群

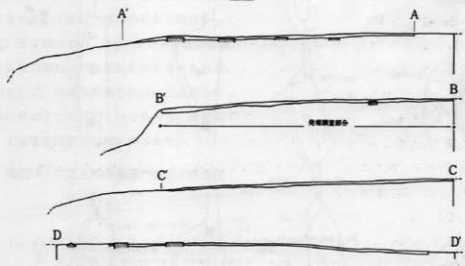
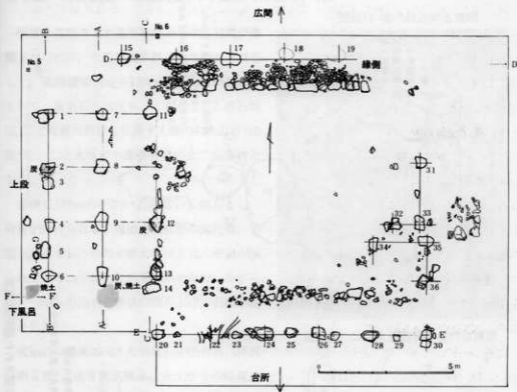
本丸南側に張り出した建物の北端にあたり、20~30の礎石が197cm間隔に並ぶ。半間毎に小さい礎石が残る。高さは一定していない。22は樹木の根があるため、礎石の存在を確認しただけである。台所建物跡の北端にあたるものである。

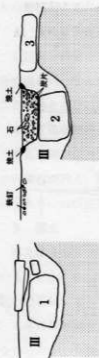
5. 覆土

本丸中央部分は約15~20cmの表土に覆われていたが、端の方へ行くに従い表土は薄くなっている。空地に至っては、南半分が既に露出していた。礎石20~30は、礎石15~19より約40~50cm低い礎石列になっていて、10~15cmの表土に覆われている。

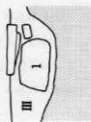
本年の発掘調査区域は本丸の上段部分の一部であるため、建物跡の概要を捕えることはできなかったが、今後の調査により新しい事実が発見される可能性があることを付記しておきたい。

挿図15 発掘された礎石実測図





釘孔
土
石
土



III



III

4

5

III



III

7



III

8



III

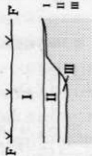
9



III

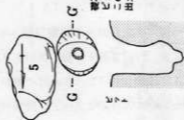
10

III層 黄茶褐色土層
II層 黄褐色土層
I層 黄褐色土層



F
I
II
III

I 黄土
II 赤褐色土
III 黄少量混入赤褐色土層



寶石No.5の西側に深さ55cmの
ビットが確認された。
この中から土師質陶器片3点が
出土している。

ビット

0 10cm

挿図16 発掘された礎石断面図

第3節 付帯調査・二之丸唐門の石垣 (挿図17, 18)

照蓮寺西側の下水道管布設工事中に石垣が確認されたので、その現況位置と現況断面を測量した。道路舗装面から130cm下に石垣が遺存していて、裏込石の状況もよくわかる。この石垣は、二之丸館の西側に位置する唐門にあたり(図版13)、二之丸周辺の遺構確認の上で好資料となる。

基底に179cmの平たい石を置いて根石とし、角度が付けられる。地山(流紋岩の風化帯)を掘り込んでしっかりと据え付けられ、安定が図られている。その上に目地合わせを行いながら、120~160cmの山石を依状に積み上げ、石垣が構築される。

裏込には標準20cm大の川原石が使われ(挿図18第Ⅱ層)、透き間がある。サラサラの砂質土が混入している。第Ⅱ層の後方第Ⅲ層は、第Ⅱ層より小さい川原石が使われ粘質土層になっていて、透き間はない。B₁(ブロック状の土層)は、後世の埋め立てによるものと考えられる。この石垣は、照蓮寺西側の崖沿いに道路を作った時に埋め立てられたものであろう。測量完了後、下水管理設と共に埋め戻された。

挿図18 二之丸館西側唐門付近の断面図



図版13 唐門付近の古絵図



挿図17 二之丸館西側の唐門位置図



2. 古銭

古銭3点が出土した。その他、明治以降の半銭、1銭、5銭なども検出された。挿図20-13, 14は銅銭寛永通寶で、空地北側の縁側から出土し、15は寛永通寶の鉄銭と思われる、風呂屋跡周辺から検出された。

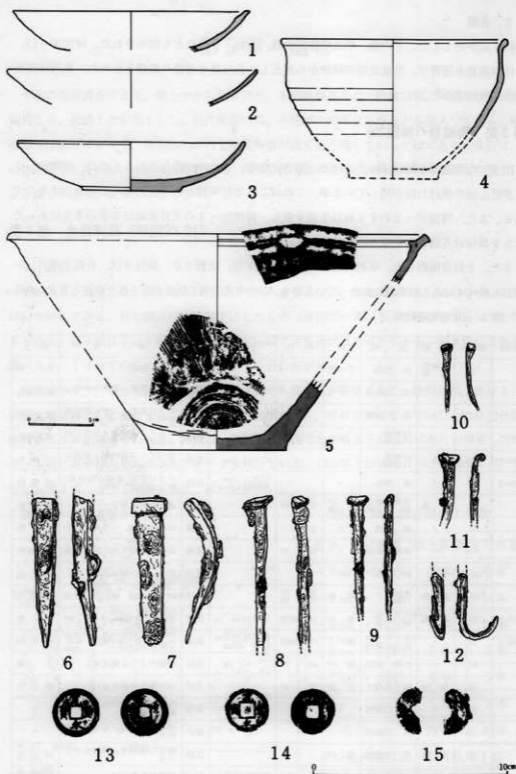
第2節 陶磁器 (挿図20)

出土した陶磁器を釉によって分けると表3になる。この中で特色のあるものは、挿図20-1, 2が灯心油の焼けた跡が残っている事、これはここで灯明皿として使われたことを示すものである。また、挿図20-5のすり鉢は生活を表し、挿図20-4の天目茶碗は茶室が本丸にあったことを裏付ける好資料となる。

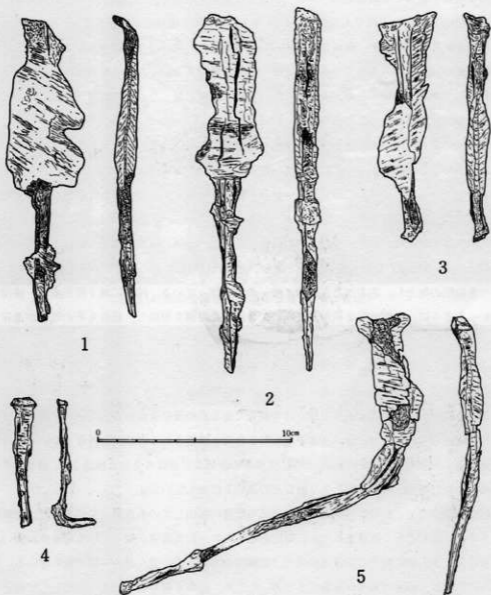
また、土師質陶器6点、灰釉陶器4点、長石釉1点、鉄釉3点、染付3点、青磁2点と、いずれも破片ではあるが多種にわたっている事も、この本丸の場で居住がなされた痕跡と考えられる。

表3 出土陶磁器類

期別	遺物No	種別	器種	窯	時代	法量	焼成	特色	胎土
	5	土師質陶器	皿 胴部	不明			良好	ロクロ整形	灰 色
	80	*	皿 口縁部	*		口径約20cm	悪い軟質	ロクロ整形、磨耗度が激しい	灰茶褐色
	82	*	皿 口縁部	*			良好	ロクロ整形・口縁に指圧痕が残る	黒 灰 色
20-2	111	*	灯明皿 口縁部	*		口径13cm	普通	ロクロ口縁内部と外部に灯心油痕のタールが付着	灰茶褐色
20-1	120	*	灯明皿 口縁部	*		口径12.2cm	普通	手づくね口縁内部と外部に灯心油痕のタールが付着	灰 褐 色
20-3	125	*	皿 70%	*		口径11.8cm 底部径5.2cm	良好	ロクロ整形、底部糸切痕有。胎土は緻密、硬質	灰 褐 色
	22	灰 釉	茶碗?鉢? 胴部	瀬戸 美濃	江 戸		普通	表面がザラザラ	黒 褐 色
	37	*	皿 底部	*	室 町?		普通	ロクロ整形、ヘラ削り高台	灰 色
	128	*	茶碗 底部	*	江 戸		普通	高台脇は削られて段をなす	淡黄灰色
	128-3	*	鉢 胴部	*	*		普通	貫入(ヒゲ割れ)有	灰 褐 色
	128-2	長石釉	小鉢 口縁部	志 野	江 戸 初期			四角の口縁、縦にスジ紋様	灰 褐 色
20-4	49	鉄 釉	天目茶碗 胴部	瀬 戸	江 戸 初期	口径12cm	良好	口縁部直下くびれて外縁、茶褐色と濃黄がミルミルに混じる。胴部にふくらみをもつ	灰 色
20-5	57	*	すり鉢 底と口縁部	瀬戸?	江 戸 初期	底部径10.8cm 口径 33cm	普通	内面底に四角のクシ目がある。すり目の物が胴縁。底部は厚く安定が良い	灰 褐 色
	91	*	小鉢 胴部	瀬 戸	江 戸		良好	押型のような施文有	灰 色
	15	染 付	皿?茶碗?	有 田	江 戸		良好	コバルトの発色良い	薄 灰 色
	29	*	蓋 口縁部	*	*		普通	釉がはがれている部分有。唐草紋様	*
	126	*	皿 口縁部	*	*		悪い	型造り。釉がとんでいる箇所有	*
	30	青 磁	皿 口縁部	九 州	*		良好	條目の紋様有。薄緑色を呈する	灰 色
	31	*	鉢の底部?	*	*	底部器厚1cm	*	淡薄緑色を呈する	*



挿図20 出土遺物 1～3土師質陶器 4天目茶碗 5すり鉢 6～12鉄釘 13～15古銭



挿図21 昭和29年太鼓槽の石垣から発見された釘(木片が付着している)

まとめ

高山城跡が遺存する城山公園一帯は、濃飛流紋岩類である錦山溶結凝灰岩層が基盤をなし、それは6500万年前の岩体である。公園の南方は、山王峠を境いに地質が異なり、約300万年前と推定される大洞礫層や、更新世（200万年～1.1万年前）にかけての層が重なっている。濃飛流紋岩類は高山盆地の基盤岩であり、大変安定した層である。本丸平坦地のようにその風化した部分はツルハシで掘れるが、深くなるにつれ硬くなり岩盤となる。現照蓮寺裏庭の崖などには、比較的新鮮で硬い流紋岩の面が見られる。

高山城の礎石は、この安定した基盤を掘りくぼめて配置されており、本丸上段部分の中央付近は、その深さを調整することによって、礎石レベルの一定を確保している。端の方は、中央部より低くなっていく地形に応じて低い位置に礎石が配置してある。これは地形に合わせて、建物の土台、^つ東が調整されたものと考えられる。

高山城跡の位置は、長野、富山、白川、下呂、美濃へと通じる東西南北の街道が見渡せる位置にあって、360度の展望が開く場所である。金森氏は築城にあたって、西の宮川、東の江名子川を自然の堀とし、北方三之丸外側に唯一の堀を作っている。同時に城下町形成は、挿園11でわかるように、自然地形を利用して極めて合理的な町割を形成し、現在もその町割が遺存している。

城山には、金森氏入国以前の15世紀に「天神山城」が存在したと伝えられているが、今回の発掘調査では、その痕跡は検出されていない。今回発見されたのは、金森氏転封後金沢藩が取り壊した高山城の跡である。石垣部分は未調査であるため遺存度はわからないが、礎石群は予想外に遺存しており、金沢藩の在藩中に作製されたと推定される古絵図と符号している箇所を確認することができた。風呂屋跡、空地、広間南の縁側などがはっきりと検出され、鉄釘、タールのついた灯明皿、天目茶碗、スリ鉢などの遺物も出土している。

現況測量調査をした際に、本丸上段の崖部で数箇所露出している石垣が発見された。石垣に至るまで、ことごとく破壊されたと記録にあるものの、相当遺構が残っている可能性が高い。

金森氏、高山城に関する記録は飛州史、飛騨国中案内、安川記などの一部に載っている。それらによると、城地の南方は尾根続きであったため、途中を掘り切って1つの山として独立させている。また北方は、尾崎を削って二ノ丸、三ノ丸の用地を確保し、削った土で寺の敷地（現在の別院）を造成するといった、大土木工事が行われた様子が著されている。今回、発掘調査により、高山城本丸建物跡の一部が確認された意義は大きく、今後の総合的な高山城跡の学術調査が期待されるものである。



図版14 北山公園からの城山全景(右手は位山)



図版15 本丸(上段)の現況



図版16 本丸(下段)の太鼓櫓下の石垣



図版17 本丸十間櫓下の石垣と水の手



図版18 大手三ノ門付近



図版19 本丸(上段)南端に露出している石垣



図版20 太鼓櫓の礎石



図版21 搦手ノ門の礎石



図版22 十三間櫓の礎石



図版23 搦手一ノ木戸の下方の石垣



図版24 発掘された遺構全景(北から)



図版25 発掘された遺構全景(東から)



図版26 空地北側の礎石群(縁側の雨落石)東から



図版27 空地西側の礎石群(風呂屋跡)北から



図版28 二之丸唐門の石垣



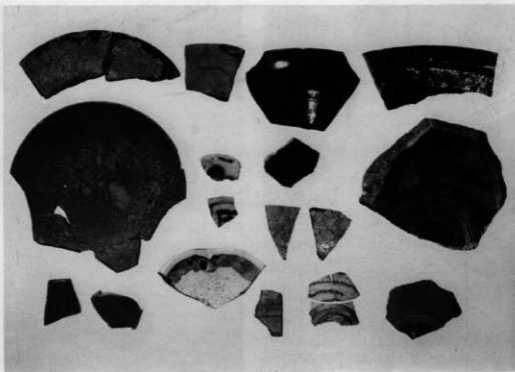
図版29 本丸の現況測量



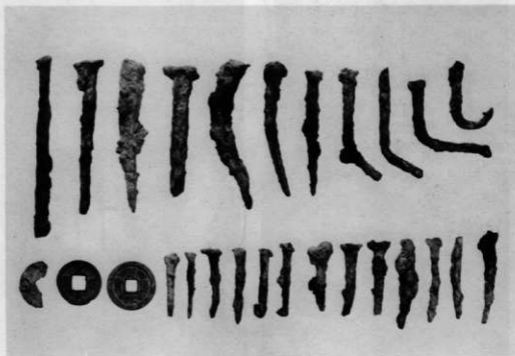
図版30 発掘作業状況



図版31 太鼓槽の石垣から発見された鉄釘



挿図32 出土遺物(陶磁器類)



挿図33 出土遺物(金屬製品)

高山城跡発掘調査報告書

昭和61年3月 発行

編集 高山市教育委員会
発行 高山市教育委員会
印刷 (有)弘文舎印刷
高山市上一之町